



# 東北大学 史料館

だより

No.13  
2010 Sep.

## TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER

### Index

- 2 東北大学史料館の現在  
東北大学史料館長 佐藤伸宏
- 4 東北大学における研究成果は国際植物遺伝子銀行  
設立に生きている  
東北大学名誉教授 江刺洋司
- 9 資料の公開について
- 10 史料館のうごき
- 12 おしらせ



明治29年（1896）第一高等学校  
野球部集合写真（石渡信太郎氏旧蔵）

## 応援のお礼？

明治29年（1896）5月、東京の旧制一高野球部（ベースボール部）は、横浜の外国人居留地運動場で横浜外国人クラブとのベースボール・マッチに臨み29対4で大勝。翌月5日にも米国人クラブチームを32対9で勝利。日本人チームとして初めて「国際試合」に勝利しました。写真は、一高校友会から選手たちに贈られた記念写真の一枚。後列中央のヒゲの男性は、「野球」の名付け親と言われる中馬庚（ちゅうまん・かなえ）。かつての一高の選手で、当時は一高野球部の監督でした。

実はこの写真、旧制二高（仙台）初期のOB石渡信太郎氏のご遺族から当館に寄贈されたものです。なぜ一高野球部の記念写真が二高OBの手にあるのか。詳しいことはわかりませんが、つながりが考えられないわけでもありません。実はこのあと7月に行われた一高チームと外国人チームの再戦に、旧制二高の学生たちがはるばる仙台から横浜に応援に出かけたのです。当時二高生の石渡氏も、その一人として上京したのかもしれませんが。二高の学生たちにとって、「兄弟校」ともいべき一高野球部の「決戦」は、決して他人事ではなかったのです。

黎明時代の日本野球界に君臨したこの一高野球部に対し、二高の野球部員たちが初めて挑戦したのは、その二年後の明治31年。一高チームの壁は厚く11対8で二高は敗北。しかし翌年の再戦では21対15という打撃戦で見事勝利をおさめました。仙台学生野球草創期の一コマです。

## 東北大学史料館の現在

東北大学史料館長

佐藤 伸 宏



本年4月に、前任の大藤修館長の後を受けて、史料館長に就任いたしました。私は東北大学文学研究科に所属し日本近代文学の研究を専門としておりますので、館長の職務は些か畑違いではありますが、東北大学史料館に託されている役割の重要性を十分に踏まえつつ微力を尽くして参る所存です。

東北大学史料館は平成12（2000）年12月の発足からほぼ10年が経過した現在、総合学術博物館、植物園とともに「東北大学学術資源研究公開センター」を組織する施設として、3名の専任教員スタッフと2名の事務職員の方々、また史料館の部会委員、協力研究員のみなさんによって支えられながら、極めて多様な業務に携わっております。

大学アーカイブズとして設置されている東北大学史料館の任務に関しては、本学に関わる各種資料の収集・受入と整理の業務をまず挙げなければなりません。法人文書（大学公文書）の受入、その他の個人および関連団体資料の収集がその主たる内容となりますが、これらの資料の受入・収集に際して、一定の基準に沿った資料の評価、選別が重要となることは申し上げるまでもありません。この評価基準については既に「東北大学学術資源研究公開センター史料館資料収集内規」、「法人文書移管ガイド」を定めていますが、史料館が大学アーカイブズとしての機能を十全に果たすためには、評価・選別の客観的な基準の策定に向けて更に慎重な検討を重ねていかなければなりません。

また公文書・個人文書を含む所蔵資料全体の適切な管理と公開を義務づける「公文書管理法」が来年4月施行予定ですので、それに対する対応も検討の課題となっております。同時に、それらの資料の公開も同様に重要な任務となります。東北大学史料館では現在、受け入れた資料のデータベース化、そして「東北大学デジタルアーカイブズ」としての公開に向けて、全学的基盤経費の活用により整備を進めております。このような大学関係の資料の収集・整理・公開を主要な任務の柱とすることによって、東北大学史料館は学内において独自の役割を果たす組織としての位置を担っております。

以上に加え、本学に関わる各種の歴史的資料の公開・展示もまた、アーカイブズとしての史料館の重要な使命となっています。史料館内の常設展「歴史のなかの東北大学」には東北大学の沿革をたどることのできる数多くの貴重な資料が展示されており、既に足をお運び下さった方々も少なくないことと思います。こうした展示と関わって史料館作成の図録『歴史のなかの東北大学』『魯迅と東北大学』等も発行しております。

今年度の事業としては、4月から5月にかけて、川内萩ホールにおける出張展示「だいがく今昔物語2010」を開催し、興味深い資料をとおして大学の過去と現在の姿を紹介しましたが、学生を含む多くの方々に楽しんでいただけたようです。また本年の企画展は「せんだい学生スポーツの黎明」と題して、9月より11月までの約2ヶ月間の開催を予定しております。近代のスポーツ、とくに仙台における学生スポーツの成立と歴史的な変化について、学生文化としての観点から様々な資料を展示する企画です。明治期から第2次大戦後に至る時期の、学生スポーツの多様な展開や歴史の変遷を映し出す多数の資料が展示される予定ですので、是非沢山のみなさんにご覧いただきたく存じます。

更に今年度は当館の所蔵する、魯迅関連資料その他の貴重資料を紹介する新たな展示室の整備を計画しております。東北大学には仙台医学専門学校在学時代の魯迅関係資料が所蔵されていますが、この度、高良とみ氏旧蔵の魯迅直筆書幅が、ご息女にあたる高良真木、高良留美子の両氏より東北大学に寄贈されました。これらの魯迅関係資料を一般に公開する記念展示室が今年度末頃にはオープンすることになります。史料館が担う資料の公開・展示という任務において、この展示室の開設は大きな意義を持つことになるものと

考えております。

本学関係資料の収集・整理、そして公開・展示という役割が課せられている東北大学史料館は、以上のよう  
に今年度も極めて多岐にわたる業務を遂行してゆくこととなります。ただしそうした役割と責任を果たし  
ていく上で、現在の史料館は、専任スタッフの数も含め、組織として十分に整備されているとは言い難い状  
況にあります。史料館がその託されている使命を全うするためには、全学的な協力体制が不可欠であると考  
えております。今後ともみなさまのご理解とご協力、ご支援を賜りますよう、心からお願い申し上げます。



25年前の記念資料室（史料館の前身）  
昭和60年（1985）11月 現附属図書館本館内



現在の史料館展示室

## 東北大学における研究成果は 国際植物遺伝子銀行設立に生きている

東北大学名誉教授

江 刺 洋 司



### 第1回地球サミット開催・生物多様性条約（CBD）採択に至る経緯

地球の人口容量は一義的に食糧供給量で決まる。産業革命前夜に10億人程だった人口は植民地政策と農耕地拡大により増加し、産業革命から波及した農業革命によって単位農地当たりの穀物収穫量が増えた結果、第二次大戦後には30億人に達した。しかしこの間冷害、干害、戦争が飢死を招き、農耕技術の改善で食料危機から脱却できる見通しはなかった。

戦後1943年に、米国は「食糧の制覇が世界の覇者への道」と、生産性の高い農法の開発をノーマン・ボーローグに託した。彼は後に緑の革命と称される新品種を創るが、茎や幹の生長に向かう光合成産物を種子数を増やすと共にその充実に向けるために、矮性品種の遺伝子を既存種に導入すると言う発想で、トウモロコシ、コムギ、イネの改良に成功した。発展途上国の食糧自給率は向上し、彼は1970年ノーベル平和賞を受賞する。その努力は地球の人類を飢餓から脱却させると思えた。しかしそれは皮肉にも世界的な人口爆発を招き、農耕地拡大や灌漑は森林破壊、塩害、砂漠化を助長して地球温暖化を促し、更には既存の多様な遺伝子群に依存してきた農耕様式を、特定の多収型品種に依存するモノトーン農耕へと変えてしまった。ノーベル平和賞は、農耕を肥料への依存度が高く病害や気候変動に脆弱なものに変え、特定の多収型遺伝子を保有する種苗会社や、化学肥料会社、農薬会社に好都合な農耕をもたらした。

緑の革命が世界を席卷する1962年、レイチェル・カーソンは農薬汚染による自然環境破壊を著書「沈黙の春」で訴え、10年後の「国連人間環境会議」開催、ローマでの「成長の限界」の報告へと続き、人類の明日に警鐘が鳴らされた。高コスト農耕が貧富の差を広げ、地球温暖化を促し、地球の余命に陰を落とす状況は、地球環境を根底から見詰め直し持続可能な地球を未来に遺すため何を為すべきかを国際社会に問いかけた。人類の生存を支配する食糧についても、単に自然環境の荒廃によるだけでなく、農民による既存の伝統遺伝子群の廃棄によって種が絶滅することも危惧され始め、生物多様性を保全するための国際的行動が求められるようになった。国連には自然保護を主たる任務とする UNEP（国連環境計画）が1973年に設けられ、絶滅危惧種の商取引を規制するワシントン条約を締結し、微生物遺伝子保全の UNESCO（国連教育科学文化機関）、有用植物保全の FAO（国連食糧農業機関）と分担して、CBD の締結を目指した国連環境開発会議への動きが始まった（表参照）。

### CBD 締結に至る過程での日本の動向と FAO の関わり

CBD は自然保護の観点から締結されたと思われがちだが、その基本理念である「地球上の全ての生き物の遺伝的多様性を包括的に保全する」ことの目的は、これらを後世の人類に持続的に利用させる点にある。食糧、医薬品、木材資源などの原材料有用植物をあるがままのかたちで保全・貯蔵利用し、その遺伝資源を自由・公正の原則下で活用することに CBD の意義がある。この訴えは1981年にメキシコが提出した国際植物遺伝子銀行（IPGB）設立要望に始まる。主要穀物種子が比較的容易に長期間保存出来るとの考えから、国際植物種子研究会議が開催され始めた。いまだ冷戦中の当時の国際社会では「種子戦争」なる言葉が独り歩きしており、この会議も西側企業がスポンサーになっての開催だった。

ところで、私は緑の革命に綻びが見え隠れし始めていた1966年、東北大学（旧）農学研究所在籍中に米国に留学することとなったが、その目的は当初、遺伝子保全にも関わる「植物における休眠」の本質を塊茎を用いて研究する事だった。しかし渡米直後、時代を見る目を持っていた故 Leopold 教授に勧められ研究材料を種子に変更し、遺伝子組成が同じだが穎果内での着床位置の違いだけで発芽挙動を異にする兄弟種子を着

**第1回地球サミット開催に至る経緯と国際植物遺伝子銀行稼働  
生物多様性条約 (CBD = Convention on Biological Diversity) 提起から締結に至る時系列**

西暦	関連委員会・スポンサー		政治・経済動向
1962	個人	レイチェル・カーソン著「沈黙の春」出版、農業汚染による自然環境破壊への警鐘	
1967			第3次中東戦争勃発
1972	UN, ローマクラブ	6月スエーデン・ストックホルムで国連人間環境会議 マサチューセッツ工科大学報告「成長の限界」	
1973	UNEP 発足	絶滅しかねない動植物の国際取引に関するワシントン条約採択、日本は1980年に締結	第4次中東戦争勃発
1974	FAO	International Board for Plant Genetic Resources (IBPGR, 国際植物遺伝資源協議会) を設立	
1981	IBPGR	12月ローマでメキシコ代表団から各国の遺伝子銀行を統括する国際植物遺伝子銀行設立の要望を受ける	
1982	UNEP	ケニア・ナイロビでストックホルム会議10周年記念会議	
1985	企業	8月17日オランダ・ワーゲニンゲンで第2回国際種子会議	
	FAO, IBPGR	第一期報告で国際植物遺伝子銀行適地を永久凍土活用とす	
1986			欧州経済共同体成立
1987	UNEP, FAO, etc.	IUCN からの要請に基づき管理理事会決定により専門家会議で地球サミット開催準備	
	FAO, IBPGR	第二期報告で各国に国際植物遺伝子銀行設立への必要度や係わり方についてアンケート調査開始	
1988	UNEP, WMO	気候変動政府間パネル (IPCC=Intergovernmental Panel on Climate Change) を共同設立	
	米国財団, UNEP, etc.	8月地球サミットに向けての第1回 Keystone International Dialogue 開催	
1989	NATO,	8月6日アメリカ・ヴァージニアで第3回国際種子会議	
	FAO, IBPGR	第三期報告でアンケート調査結果集計で国益と国際植物遺伝子銀行への依存度格差が明確となる	ベルリンの壁崩壊
	FAO, IBPGR	第四期報告でノルウェー政府から自国の Svalbard 島の永久凍土層にある廃坑を国連に提供申し出あり	
1990	米国財団, UNEP, FAO, etc.	2月14日インド・マドラスで植物遺伝資源に関する第2回 The Keystone International Dialogue (ロシア参加、日本人不在)	
	UNEP,	第1回11月政府間条約交渉会議 -1992年本会議まで7回開催	東西ドイツ統合
	FAO, IBPGR	12月4日イタリア・ローマで国際植物遺伝子銀行設立専門家会議が前4回の経過を踏まえて開催	
1991	FAO, IBPGR	地球サミット向け国際植物遺伝子銀行設立準備国際会議の日本開催要請 (日本政府は拒絶)	第二次湾岸戦争勃発
1992	UNEP, IUCN	5月22日ケニア・ナイロビでCBDのための合意テキスト採択会議	
	FAO, IBPGR	5月26日イタリア・ローマでCBDのための合意テキスト採択会議	欧州連合 (EU) 発足
	UNEP, FAO, UNESCO	6月2日ブラジル・リオデジャネイロで国連環境開発会議 (第1回地球サミット (UNCED) 開催), CBD と IPCC 調印	
1993	UNEP, FAO, UNESCO	生物多様性条約発効。IBPGR は IPGRI に改称	
1994	UN	エジプト・カイロで国際人口開発会議 (ICPD=International Conference on Population and Development) 発足	
2001	UN	2nd UNCED は「持続可能な開発」をテーマとして2002に南アフリカ・ヨハネスブルグで開催	アメリカ同時多発テロ
2003	UN, IPGRI	バイオセーフティーに関するカルタヘナ議定書発効 (DNA 組換え生物等規制) / 4月 CBD 締約国は米国際き187国	
2004	UN, UNEP, FAO	CBD-COP7, マレーシア、遺伝資源へのアクセス、その利用による利益配分の国際枠組み議論	
	Norway 政府, IPGRI	SIS=Svalbard International Seedbank (スヴァールバード国際種子銀行) 建設開始	
2008	UN, UNEP, FAO	CBD-COP9, ドイツ・ボン、同上の国際枠組み協議続くー都市部での生物多様性保全等	パレスチナ紛争続く
	Global Crop Diversity Trust	SIS 稼働開始	

けるオナモミを扱うこととした。オナモミは受精が同時でも子房内での着床位置が下部なら休眠せず、上部なら一年の休眠後に発芽する実験材料で、現地で採集出来た。研究の結果、種子における休眠が遺伝子支配の生理現象とは限らないと判明し、これは1980年代の植物生理学の教科書で種子の発芽・休眠の仕組みとして紹介された。私はこの成果で国際会議での特別講演（1985）を行い、1989年にはNATOがスポンサーの国際会議で座長（1989）を勤めた。その直後に冷戦は終結、翌年のEU成立によって、国連による第一回地球サミット開催に弾みが付けられた。

他方、1970年代から、各国でも動植物遺伝子の保全への動きが生まれていた。日本政府も1973年になって国立ジーンバンク構想を打ち出し、10年後につくば研究学園都市に農業生物資源研究所を設立した。しかし当時の植物遺伝子保全の理論は、種子には乾燥に耐えられない熱帯植物に多い recalcitrant 型と、多くの穀物のように乾燥に耐える orthodox 型の二種があり、後者は酸化反応を抑えれば長期間保存可能という程度の、不確かなものであった。各国の種子貯蔵施設は乾燥種子を容器に収め $-10^{\circ}\text{C}$ 程度で保存していた。当時、最も進んだものはスウェーデン Alnarp に設置された北欧5カ国共同遺伝子銀行で、 $-20^{\circ}\text{C}$ で保存されていた。日本では $-10^{\circ}\text{C}$ 。一方熱帯地方に多い発展途上国では永久凍土下の $-3.5^{\circ}\text{C}$ でさえ得難い低温であった。これらの乾燥低温貯蔵下でも、種子は単に死滅するだけでなく、時には奇形（典型は葉緑体欠損のアルビノ）を生むが、それは酸素存在下で進行する通常の老化、生体内で極めて重要な機能を果す膜構成要素の脂質の酸化や補酵素（ビタミン）類の失活では説明しかねるものであった。

FAOは国際農業研究協議会（CGIAR）から勧告を受け、それらを統括するIBPGRをローマに組織し、本格的に植物遺伝資源の収集・保全に取り組む国際的ネットワーク作りを指導した。しかし、収集が順調に進んでもそれらの貯蔵容量に限度があり、万が一の事故・災害に備えた重複保全の必要性が生じた。前記のメキシコの要望も、分散貯蔵されている遺伝子の一部を1カ所に集約し超長期間保存して相互利用を可能にする、国際的な中央遺伝子銀行設立の構想だった。

当時、IBPGRのスタッフには日本人は1人も居なかったが、運営資金の点では日本が最大の拠出国で、例えば1990年のバブル経済破綻後でも1,272,265\$であった。第二位の米国950,000\$、第三位の英国91,8919\$を凌ぎ、中国は49,985\$に過ぎない。そして遺伝資源の担い手の種子科学研究の国際的リーダーの一つだったのが、東北大学教養部の研究陣である。その代表として私は1992年、フランスで開催された第4回国際種子科学会で、種子科学の発展に貢献した世界を代表する4名の科学者の1人に選ばれた。その背景があつてか、1990年9月14日にFAOの植物生産保全部門代表のDr.L. BraderとIBPGR所長のDr.D.H.van Sloten連名の招聘状と、ある報告書が私の手元に届いた。私は直ちに要請に応じてFAXしたが、その直後の9月20日、FAOとIBPGR代表による、CBDの理念を活かすためのIPGB計画具体的化に向けての調印式がローマで行なわれた。

## 従来の種子劣化原因説への疑問から新たな劣化システムの実証・提言へ

私が受け取った書面には、IPGB設立のためノルウェー政府が主権下にある永久凍土のSvalbard島を国連に提供すると言っており、その予備調査の報告書について、場所や設備の適性、銀行運営上のルール等を専門的立場で評価して欲しい、とあった。この島は北大西洋暖流のため冬季も港が凍結せず、炭鉱会社があるために小さな空港も備わるなど利便性の高い北極の地で、年間を通じて $-3.5^{\circ}\text{C}$ と云う低温で種子を貯蔵できるとあった。私を招致する経費をFAOが全額負担するだけでなく、宿泊ホテルまで予約してあった。だが私には、調査報告書の計画が人類が望む半永久的な遺伝資源貯蔵が可能なものとは思えなかった。最大の問題は、orthodox型種子の超長期間の貯蔵用施設が、従来の種子劣化メカニズムに基づいて計画されている点にあり、中期的な貯蔵を目的とする各国の遺伝子銀行に優るものではなかったのだ。

私事ではあるが、サカタの種（株）友の会員であった家内が連作を避け隔年で注文するスイートピー品種の播種を、専門家であるとの理由で私が任されていた。ところが、最初に購入した種子は専門家の私でもアルミ袋に記載された様には発芽させ得ず、やむなくクレームし再送させて発芽させた。私は袋詰め前の種子がユーザーに渡る前に劣化した結果と考え、次回から播種前に各品種のアルミ袋を





発芽床前に並べ、袋や種子の外見をメモし、水浸後に膨潤したものから順に吸水させたペーパータオル上に並べ、記録メモと発芽状況との関係を調べた。その結果、内部発生で膨らんでいる袋の品種ほど発芽率が低いことが認められた。アルミ袋の膨張と発芽率の減少の関係は、従来の理屈では説明出来ない。もし劣化が酸化反応に起因するならば、写真1（河原町大町タネ店提供ヒマワリ）に見るように破裂寸前にまで劣化種子袋が膨張するとは思えず、かねがね種子の劣化には酸素の存在下で起こる代謝以外の何らかの反応が関わっているのではないかと考えていたのである。

そのため、私はFAOから依頼された際に、この疑問に何等かの決着を付けねばとこの問題の検証を始めた。ローマ行きまで2ヵ月ほどあったので、大町タネ店の協力で活力のある種子を購入する一方、売れ残りの種子缶も無料で頂戴し、その缶内と生きている種子を短期間収めた容器内のガス分析を、手持ちのガスクロマトグラフで調べた。予測通り、発芽する種子を詰めた容器内からも、エタノールとその酸化中間体で有毒なアセトアルデヒドが共通して検出された。最近新築家屋で注意が喚起されているシックハウス症やアルコール中毒・依存症の原因とされるものである。これらのガスは永久凍土廃坑内の気温 $-3.5^{\circ}\text{C}$ でさえ発生すると予測できる。となれば、遺伝子劣化の既存の学説には問題があり、それに基づくIPGB計画原案にはストップを掛けねばならない。12月、諸条件の全面的見直しが必要と主張するための情報を携え、私はローマに向けて飛び立った。

### 第一回国際植物遺伝子銀行設立会議から日本がリーダーとならざるを得なかった

IPGB設立に向けての初の専門家会議は、1990年12月4日からIBPGR会議室で開催された。しかし、写真2で分かる様に肝心の、後のアメリカ国立遺伝子銀行総裁Dr. Roosが欠席し、初日は代理議長下で予備調査に基づく提案文書の説明に費やされた。翌日から意見交換となったが、米国代表の欠席でも先進国と発展途上国との間の溝は深く、喧嘩腰の論争となった。

2日目の朝、私は臨時議長の了承を得て、一通り論点の整理が終了した後、持参した試験結果の資料を配布した。その結果、原案そのものに欠陥があると全員が感じ、会議の雰囲気は一変してしまった。その晩、私はホテルに戻って、この2日間の討議を私なりに意見書にまとめ、翌朝会議開催前にIBPGRの事務室でタイプし、追加討議資料として提出した。

植物種子自体が乾燥低温貯蔵下でアルデヒド基保有の有害揮発性化合物（塩基性アミノ酸と結合）を放出しているとの新知見によって、3日目朝から会場の雰囲気は激変した。FAO/IBPGRの原案に、先進国・発展途上国との対立とは違って、科学技術の立場からの批判が加わってしまったのだ。その結果、次の会議を是非とも日本で開催するよう日本政府に働き掛けて欲しいと要請された。私はバブル経済破綻直後では無理だと火消しに徹し、IBPGR所在のローマで開くべきと応答した。それでも翌年1月18日には、IPGB設立会議を日本で開催して欲しいとの手紙が、初回専門家会議報告書と共に届いた。そこには私の意見書もNOTES by Prof. Y. Esashiとして掲載されており、私はIBPGRへの拠出金に相応しく日本からも研究員を出すべきとの説得を兼ね、当時の農水省、環境庁、文部省等の関係部局に国際会議の報告とIPGB設立準備会議開催の陳情を行なった。5月にはIBPGRが低温保存中のイネとエンドウの種子容器内でのエタノール・アセトアルデヒドの存在を追試確認したと伝えて来た。

私は内藤記念科学財団から「永久凍土条件下での遺伝子安定性に関する研究」で支援を受け、種子缶を購入し、蓄積されている自己放出ガス成分の分析を高砂香料工業（株）総合研究所に依頼、57種、アルデヒド基保有の成分で17種を確認し得た。その内入手可能な7化合物の種子劣化に及ぼす効果を1mM濃度で $-3.5^{\circ}\text{C}$ で調べ、アセトアルデヒドだけでなく全てが劣化を促し、その作用は低温・低湿度下で減少することをIBPGR側に伝え、国際専門誌上で発表した。

こうして、1992年6月ブラジルで開催される初回地球サミットの日を迎え、UNEPでは5月22日から、FAOでは5月26日からCBDに向けての最終草案点検のための会議が召集された。米国国立遺伝子銀行総裁になっていた米国代表Dr. Roosは専門家会議の委員長に選任されたが、今度は中国代表が欠席した。先進国・発展途上国間の対立点は後回しにされ、当面はノルウェー政府の厚意を受け入れるための調整を行



写真2

なった。私も現地でローマの日本大使館を訪ね経緯を説明し、IBPGR に人材を振り向ける様に本国への働き掛けを大使館に依頼した。だが、現実には、前年に勃発した所謂第二次湾岸戦争が国連自体の財政を圧迫し、IPGB 設立資金の目途も消えて、国連が理想とする、人類に開かれた持続可能な未来のための IPGB 設立計画は暗礁に乗り上げてしまった。

### 第一回地球サミット後の経緯・ノルウェー政府の努力で今に至る

こうした中で IPGB 計画は断念されたかと思われたが、1992年8月、地球サミット開催を機に IBPGR を国際植物遺伝資源研究所 (IPGRI) に衣替えしたとの知らせが届き、さらに IPCB 運営資金の一部の支援を日本政府に働き掛けるよう依頼された。やむなく私はローマ日本大使館に Fax で依頼すると共に、再度その手紙を持参して上京し政府の関係部局へ陳情した。同時に、定年が近く研究に集中せざるを得ず、専門家委員を辞退したいと告げた。

大使館の働き掛けのためか、1993年に岩永勝氏が IPGRI の副所長に着任、やっと拠出金相応の人材を送り込む事に成功し、後に彼の努力もあって IPGB が Svalbard 島に新設 (SIS) される事になる。私も彼の協力要請に応え、運営費を財界からも得るべく民間のファンド・リストをローマに送るなど支援を続けたが、最早バブル経済の破綻した日本に国際社会に出資する企業はなく、結局は米国の各種財団の支援に依存することとなった。

文部省はこの動きをふまえ東北大植物園に教授職を新設して私を任じ、1994年度から科研費 A で私の研究助成に乗り出してくれた。お蔭で、定年直前の2年間の研究は充実した。種子の超長期的保存のための基礎条件の研究は、1990年3月の種子関連国際会議 (上海) 以後私の研究指導を仰ぎ1992年来日した中国の修士留学生 (張明) に担当させた。研究設備も整い、またアルコール依存症と戦う内科医、加藤純二氏の協力や、北里医療センター菊池晴久氏との共同研究が実り、予測通り植物種子の劣化システムはアルデヒド基による蛋白質変性過程である事を抗原抗体反応で立証した (定年後1997年発表)。同時に開発した微量変性蛋白質の新検定法は東北大学の特許となった。

1994年にはコーネル大学からの共同研究要請にも応え、学位取得のために米国から来仙した台湾出身の留学生李柏静が研究に参加。同年私は米国国立植物遺伝資源研究所の Dr. Roos に招かれ渡米講演、逆に翌1995年には彼が東北大視察に来仙する (写真3、拙宅で家内と共に)。この間、植物種子自体の放出するアルデヒド類が自家中毒の如く自らの活力を減らすだけでなく、主役のアセトアルデヒド放出に関わるエタノール脱水素酵素も  $-15^{\circ}\text{C}$  まで働くことを解明し、前述の SIS 原案が不適切であることを実証した。SIS 建設計画は、全面的な見直しが必要となった。

私達の研究成果については、IPGRI の岩永氏が、植物遺伝資源保全に関わる研究を日本がけん引していると紹介したが (1994年)、国連は SIS 建設を主導出来ず、代ってノルウェー政府が独自に、私の意見を基に Svalbard 島の永久凍土の海拔130m の山岳中腹で新 SIS 建設 (自称、ノアの箱舟) に踏みきった。それはその下層の炭鉱から掘り出される石炭で火力発電所を稼働させれば、地球温暖化が進み凍土が消え海面が上昇しても、植物遺伝資源を  $-15^{\circ}\text{C}$  以下で半永久的に後世に遺せる施設。だが、頼りの日本政府も企業もその運営に応え得ず、また委員長を出した米国は未だに CBD を批准しない。2008年に稼働した新 SIS の運転維持費用は米民間のロックフェラー財団、モンサント (株)、ビル・ゲイツ等が負担する結果となり、その経緯を知らぬ人々からは、「種子戦争」が残像となつてか、IT 上では SIS は穿って見られている。

だが、1940年代に喫煙が健康問題として脚光を浴び、今春には WHO はアルコール飲料による健康被害を今後の社会的問題として取り上げ、SIS 建設を断行したノルウェー政府は先頭を切つてアルコール飲料の規制に取り組み始めた。将来、日本でもアルコール飲料の流通は規制される事になるが、その原点は東北大学にあったのである。





## 資料の公開について

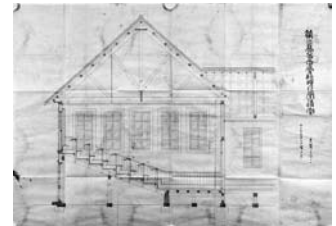
史料館では、公開準備が完了した資料の目録を順次ホームページ上で公開しています。平成21年（2009）4月から21年8月までの間に目録を公開した主な文書は、以下の通りです。これらの資料目録は、当館ホームページ（<http://www.archives.tohoku.ac.jp/>）より入手することができます。

### ●法人文書

#### 第二高等中学校建築図面 18点

第二高等中学校（旧制二高）の片平校舎建築時における建築図面一式。明治21年から24年にかけての年代が記されている。当時の教室や研究室、生徒控室や寄宿舎等々、明治中期における学びの「場」を具体的に知ることができる貴重資料である。

なお、この建築図面の中に「第二高等中学校理化学講堂図」として残されている建物が、現在片平キャンパス内に「旧制二高物理学教室」として残されている。当初の建築場所から移さ内部も改造されているが、外観は明治当時そのままのたたずまいを残しており、図面とあわせて、当時の状況を復元することができる。



第二高等中学校理化学講堂図



旧制二高物理教室（現存）

### ●個人・団体文書

#### 北杜夫関係文書 30点

北杜夫（本名斎藤宗吉、1927～）は、歌人・斎藤茂吉の次男で、昭和35年（1960）に芥川賞を受賞した作家。「どくとるマンボウ」として知られる。昭和23年に東北大学医学部に入学し、同28年に慶応大学医学部に入局するまで仙台で暮らしていた。松本高校から東北大学までの学生生活を、後に『どくとるマンボウ青春記』に記している。高校から大学まで北杜夫氏の同級生であった宇留賀一夫氏の寄贈資料に、渡辺不二夫氏（仙台における北氏5番目の下宿・渡辺家の子息）から寄贈されたハガキ複製、北氏自身からの寄贈されたマブゼ国紙幣が加わっている。

#### 石原純・長岡半太郎書簡等（池辺常刀旧蔵）22点

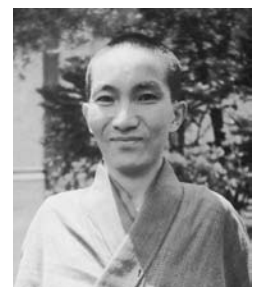
東北帝国大学理学部教授として物理学を専攻しアインシュタインの業績を広め、一方で歌人阿佐緒との交流でも知られる石原純（いしはらあつし、1881～1947）、石原の師で東京帝国大学教授だった長岡半太郎（1865～1950）の書簡や文章を収める。旧蔵者の池辺常刀は、理化学研究所で研究に従事し、後に（株）東京精密測器の社長となった人物。



石原純書簡（1922年）

#### 大島正隆文書 追加分 42点

大島正隆（1909～1944）は、東北帝国大学の卒業生で、若くして亡くなったが、東北地方の中世史研究の開拓者として知られている。すでに286点が公開されていたが（前号参照、点数の287は286の誤り）、このたび実弟の大島智夫氏より寄贈された資料を整理の上追加し、合計328点を改めて公開した。追加寄贈資料の大半は、大島が家族に送った書簡で、加えて没後40年を記念して開かれた会の記録等を含む。



大島正隆写真（1934年）

## 史料館のうごき (2010.4～8)

### ○平成22年度の法人文書移管作業を行いました

平成21年度末に保存期間を満了した本部その他の部局の法人文書に対する評価選別作業を行い、約100点の文書を新たに史料館へ引継ぎました。これらについては、すでに移管されている他の文書とともに内容等に関する点検調査を行い、その後閲覧に供する予定です。



### ○東北大学初任者研修「東北大学の歴史」講義

4月1日採用の東北大学新規採用者初任者研修にて、「東北大学の歴史」に関する講義を行いました(担当:永田准教授)。初任者研修での大学史の講義は2007年(平成19)から行われているもので、これからの東北大学の歴史を支えていく職員にむけ、東北大学設立の理念や、戦前・戦後の大学が直面してきた様々な課題をとりあげ解説をおこないました。

### ○川内萩ホールギャラリー展示

2010年4月から6月30日まで、川内萩ホール(東北大学創立百周年記念会館)1階展示ギャラリーにて「大学今昔ものがたり2010-東北大生なら知っておきたいその歴史」を開催しました。展示では、時代時代の学生たちやキャンパスの変遷を映す多数の写真とともに、①大学教授のお仕事、②東北大学の「かお」、③学びの「かたち」といった三つのテーマで、合計16点の資料を展示紹介いたしました。



### ○新公開資料速報展

「明治の学校-第二高等学校建築図面」

7月26日より、展示室内の新公開資料展示コーナーで、第9回新公開資料速報展「明治の学校建築-第二高等学校建築図面」を開催しています。現在の片平キャンパスの出発点となった、明治中期の第二高等学校の建物群の設計図等を、実際の建物の写真とあわせて展示紹介しています。

### ○史料館所蔵資料ギャラリーの公開

史料館のホームページ上で、「東北大学史料館所蔵資料ギャラリー」の公開を開始いたしました。史料館の所蔵する資料のなかから、美術資料や実験器具、表札や建築遺品、学生生活に関する用品類などの多様な資料の画像が検索できるようになっています。登録点数はまだ少ないですが、史料館所蔵の名品の一部をネットワーク上でも閲覧できるようになりました。是非一度お立ち寄りください。

アクセス：<http://www2.archives.tohoku.ac.jp>

→所蔵資料データベース/所蔵資料ギャラリー



## ○高良とみ旧蔵の魯迅自筆書幅を受贈

戦前から戦後にかけて平和運動家として活躍した元参議院議員・高良とみ（1896-1993：左下写真）がかつて魯迅から贈られた自筆の書幅が、ご令嬢である高良真木・高良留美子両氏からこのほど本学に寄贈されました。去る6月23日（水）におこなわれた受贈式では、ご遺族を代表して高良留美子さんから井上明久総長に書幅が手渡され、あわせて、この書幅にまつわる様々なお話をご披露いただきました。



高良とみは、女性心理学者の草分け的存在でもあります。キリスト者としての立場から平和運動や女性運動に参加し、インドの詩人・タゴール（1913年ノーベル文学賞）との交友、戦後の日ソ・日中関係の回復に向けた活動などの国際的な活躍で知られています。

彼女がこの書幅を魯迅から贈られたのは、1932（昭和7）年1月のこと。前年9月の満州事変を契機に中国での抗日運動が高揚する中、中国の友人や知識人たちと胸襟を開いて相談したいという思いで、単身長崎から上海に渡った時でした。上海到着後、文化人たちのサロンでもある内山書店に出向いた高良は、店主の内山完造に「中国の新しい作家」魯迅と会うことを勧められ、内山書店の2階で、魯迅・内山および許広平（魯迅夫人）の4人で食事をします。高良は席上で自分の想いを魯迅に語り、魯迅は高良の言葉に黙ってうなずきながら、かつて日本に留学した頃のこと、藤野巖九郎先生の思い出などを懐かしそうに語ったそうです。当時魯迅には国民党政府の逮捕状が出され事実上の軟禁状態にあり、行動や発言が強く制約されている状況でした。

高良はその後急病となり、夫の旧友でかつての東北帝大の留学生でもある医学者陶熾（文学者陶晶孫）の治療を受け療養したあと、結局当初の計画をほとんど果たせないまま上海から帰国の途につきます。その帰国に際し、魯迅は内山完造を通じて、一篇の詩を高良に届けました。

血沃中原肥勁草	血は中原に <sup>そそ</sup> 沃いで <sup>けいそう</sup> 勁草を <sup>こ</sup> 肥やし
寒凝大地発春華	寒は大地を <sup>こら</sup> 凝して <sup>しゅんか</sup> 春華を <sup>は</sup> 発す
英雄多故謀夫病	英雄 <sup>こと</sup> 故多く <sup>こと</sup> 謀夫は <sup>び</sup> 病む
淚灑崇陵噪暮鴉	淚は <sup>そうりょう</sup> 崇陵に <sup>そそ</sup> 灑ぎ <sup>ぼ</sup> 暮鴉 <sup>あさわ</sup> 噪ぐ

（読み下しは、高田淳著『魯迅詩話』1971年岩波書店による）

杜甫の詩など古典の要素を踏まえながらも、そこに歌い込まれたのは、中国人民の血が多く流されているにもかかわらず「英雄」たちが内紛に明け暮れる、当時の政府に対する批判でした。それは、会食の場で声に出すことができなかつたものでした。魯迅はいったいどのような想いで、初対面の日本人女性にこの書を託したのでしょうか。

日本と中国が「国」として激しく対立するなかで、ひっそりと実現した二人の対談。二人の切実な想いが交錯する中で贈られたこの書幅は、本学が所蔵する魯迅の仙台医学専門学校留学に関する資料とともに、現在史料館で整備計画をすすめている、魯迅をテーマとする新しい常設展示（2011年3月公開予定）において、一般公開する予定になっています。

（永田英明）



魯迅の自筆書幅と高良留美子さん（右）・井上総長（左）

企画展のお知らせ

## せんだい学生スポーツの黎明



日本の近代スポーツの歴史は、学生スポーツの歴史と切り離して考えることができません。私たちが学ぶ仙台でも、ベースボールやボート、スケート、ラグビーなどなど、今日私たちが親しんでいる数々のスポーツにいち早く関心を寄せ、その普及発展に力を注いだのはやはり学生たちでした。



年度の企画展では、旧制二高や東北帝国大学などに学んだ学生たちと「スポーツ」との関わりに光をあて、「学都」仙台における学生スポーツの源流、学生たちの様々な「スポーツ文化」についてご紹介いたします。

展示期間 **平成22年 9月17日（金）～11月19日（金）**  
 ※期間中は、土日祝日も含め全日開館いたします。  
 会場 東北大学史料館 2階展示室 入場無料  
 開館時間 10:00～17:00 ※土日祝日は16:00まで

### ◆公開講座 せんだい学生スポーツの誕生

掘り起こし野球ロマン－仙台学生野球事始

高野 眞五人氏（『野球事始仙台物語』著者／元仙台商業高校野球部監督）

松島湾と旧制二高艇部－仙台学生ボートの黎明

谷澤 直人氏（『朝風にオールをとりて』著者／東北大学漕艇部 OB）

平成22年10月30日（土）13:00～16:00 東北大学さくらホール 2階会議室／入場無料

※事前の申し込みが必要です。①氏名②連絡先をご明記の上、下記の方法で東北大学史料館までお申し込みください。なおお申し込みの際には「公開講座申込」とご明記ください。

① FAX：022-217-4998 ②電子メール：desk-tua@library.tohoku.ac.jp

③往復はがき：〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1

### ◆展示解説ギャラリー・トーク

当館の担当スタッフが、今回の展示のみどころをおもしろく、わかりやすく解説！

9月19日（日）、および10月11日（月・祝） 時間：13:30～14:30

史料館 2階展示室内にて ※事前申込みは不要です

## 資料の収集にご協力をお願いします

東北大学で活躍した教職員、東北大学で青春を過ごした学生たちの歴史を豊かに伝える「東北大学校友アーカイブズ」の構築のため、当館ではかつて本学にご在学、ご在職された方々、その他本学にゆかりのある方々に、お手許にある本学の歴史や学生生活に関わる資料のご提供をお願いしております。ご協力をいただける方は、当館までご連絡をお願いいたします。

**収集資料の例** 本学での学生生活に関わる資料（各種学生団体の記録や印刷物、学生服・制帽など）  
 本学での教育研究活動に関わる資料（講義ノート、大学運営に関する各種の記録など）  
 本学に関する映像資料（写真、ビデオテープ、その他）

東北大学史料館だより 第13号 2010年9月13日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 tel 022(217) 5040

E-mail desk-tua@library.tohoku.ac.jp URL http://www2.archives.tohoku.ac.jp/